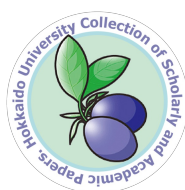




Title	改作する安部公房「友達」：その人物造形と共同体概念を巡って
Author(s)	李, 楚妍
Citation	研究論集, 25, 13 (右) -25 (右)
Issue Date	2026-01-16
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.25.r13
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/98785
Type	departmental bulletin paper
File Information	22_rjgshhs_25_p013-025_r.pdf



改作する安部公房「友達」

—その人物造形と共同体概念を巡って—

李 楚 妍

要 旨

自作の小説「闖入者」（一九五二）に基づき、安部公房は戯曲「友達」（一九六七）を書き上げた。その後の一九七四年五月・六月に安部は「友達」の改訂版を安部公房スタジオで上演し、一九八七年八月に改訂後の「友達」が文庫化された。「友達」の作品群を論じた先行研究において、「友達」と「闖入者」との比較、作品が発表された当時の時代背景、主人公と家族の人物像などの問題はよく取り上げられてきた。

本稿においては、まず「友達」の改作過程を具体的に考察し、三作品の相違点を整理する。先行研究で着目されなかった「友達」改訂版の上演台本を取り上げ、戯曲の内容と安部公房スタジオとの関係性を明示する。次に作品の時代背景と安部自身の活動を視野にいれ、「闖入者」と「友達」の作者の二人は敵という安部の発言の意味を解明し、作品と安部の思想変容との関連性を明確にする。主人公、三男、次女の人物像をも分析する。主人公は気弱な人間でなく、三男と次女とは対照的で作品の二つの主題を前面に押し出している。三男と次女の物語から彼らの共同体観が読み取れ、作品における共同体への問いと繋がっている。最後には「友達」の共同体概念について探究し、家族は改訂を経て善意的になったが暴力性を持っており、共同体概念自体が脆弱性を持つと指摘する。

「友達」は改訂を経て共同体概念を相対化し、共同体についての再考を読み手に求めている。安部は頻りに自作を改稿する文学者であり、その改稿の理由は、安部が一定の枠組みに縛られずに思索し続けていることにある。

はじめに

一九六七年九月に安部公房の戯曲「友達」(一九六七)は第三回谷崎潤一郎賞を受賞した。受賞作ではあるが、ほかの安部の名作と比べ「友達」の作品群に関する先行研究は少なく、照明を当てられていない部分が多い。

「友達」について(一九六七)において、安部は「この戯曲は、小説『闖入者』(一九五一年)をもとにして書いた」と述べ、「友達」と自作の「闖入者」³との関連性に言及した。一九六七年三月に「友達」は『文芸』に発表され、同月に青年座において初演された。一九七四年五月・六月に安部は「友達」の改訂版を安部公房スタジオで上演した⁴。一九八七年八月に、改訂後の「友達」は文庫化された。本稿では、特に説明がなければ、新潮社の『安部公房全集』に収録されたテキストを使用する。

「友達」の作品群を論じた先行研究において、「友達」と「闖入者」との比較、作品が発表された当時の時代背景、主人公と家族の人物像などの問題点はよく取り上げられてきた。「友達」が発表された当時に、武井昭夫⁶と羽山英作⁷は「友達」を「闖入者」と比較し、主人公や家族の造形について考察した。その後の一九七二年に、石沢秀二⁸も同じ問題点に注目し、次女の人物像などについて分析した。ただしこの三つの研究において、「友達」の評価や人物造形についての論説はやや画一的で、まだ検討する余地がある。近年の研究としては、友田義行⁹の論文があげられる。友田は「闖入者」と「友

達」との比較だけでなく、一九八九年に日本で上映された映画「友達」についても考察したが、「友達」とその改訂版との相違点についてはあまり触れていなかった。

本稿においては、先行研究の問題点を踏まえた上で「闖入者」、「友達」、「友達」改訂版という「友達」関係の三作品を中心に考察し、三作品における人物造形や共同体などの問題点を解明する¹⁰。三男と次女の物語から彼らの共同体観が読み取れ、作品における共同体概念への問いと繋がっている。まず「友達」の改作過程を整理し、三作品の相違点を明らかにする。「友達」改訂版が上演された当時の上演台本の内容をも視野に入れ、安部公房スタジオの事情と関連づけながら考察を行う。次に「友達」の改作と安部自身の共同体観の変容との関連性を検討し、「友達」の作品群の位置づけを明確にする。さらに、作品の人物造形を具体的に分析し、主人公、三男、次女についての新しい読解を提示する。最後には「友達」とその改訂版における共同体の捉え方について探究し、安部の改作の意義を示す。

一、「友達」の改作過程

まず「闖入者」と「友達」を比較する。

二つの作品はともに主人公の男と闖入家族との物語を描いたが、主人公と家族の造形も結末も異なっている。「闖入者」に登場した暴力的で残酷な家族と比べ、「友達」に登場した家族は主人公に好意

を抱き、善良なように見えている。「闖入者」の主人公は最後まで家族に激しく反抗し、ピラをたくさんまき散らしたが、脅迫と餓えに疲れはて死んでしまう。それに対し、「友達」の主人公は家族に檻に閉じ込められ、次女に毒殺される。先行研究では、特に主人公の造形が注目された。武井昭夫は一九六七年に発表された論評において、「友達」の主人公は「後退につぐ後退、譲歩につぐ譲歩を続け」、「闖入家族の奴隷となり、はてはあつさりと毒殺されてしまう。K君の敢闘精神など、ここには微塵も見られない」¹¹と批判した。この観点は多くの研究に踏襲された。羽山、石沢、辻合¹²なども「友達」の主人公を気弱な人間として捉え、主人公を批判した。しかし、主人公はそれほど気弱な人間ではないと考えられる。第三章でそれについて詳しく分析する。

「友達」と「友達」改訂版との最大の相違点は登場人物の変更である。「友達」改訂版において家族の祖母は祖父に変わり、三男が新しく登場する。「友達」に登場した元週刊誌のトップ屋は改訂版に現れず、代わりに婚約者の兄が登場する。辻合は「戯曲が改訂されたといっても、もちろんその主題までもが変ったわけではない。筋の展開を含めて、これは正しく、われわれの知る、安部公房作『友達』である」¹³と述べた。友田も「物語の筋は改訂前とほぼ同じである」¹⁴と述べ、改訂前後の「友達」の相違点を具体的に論じていなかった。「友達」のほかの先行研究においても、「友達」とその改訂版の具体的な比較は見受けられない。

しかし、「友達」と「友達」改訂版は形式と内容が異なっている以

上、その主題も変容するはずであり、二つのバージョンの相違点に照明を当てるべきではないだろうか。作品の内容面について言う、改訂版に新しく登場する三男は重要な位置づけを持ち、改訂版の主題にまで影響を及ぼしたと考えられる。また、改訂版において家族は全体としてより礼儀正しく好意的になり、共同体そのものが問われている。この二つの相違点については後でさらに詳しく考察する。

作品の形式だけを見ても、改訂前後の「友達」はかなり異なっていると言える。改訂する前の「友達」が谷崎潤一郎賞を受賞した際に、選考委員のなかで三島由紀夫のようにこの作品を賞賛する文学者もいれば、舟橋聖一のように作品の短所を指摘する文学者もいた。三島は「友達」が「共同体原理のやさしく甘い残酷さを描き」、ダイヤローグは抜群で、構成的に間然するところのない戯曲だと「友達」を高く評価した¹⁵。それに対し舟橋は「作者の才筆が走りすぎ、余計な饒舌にわたってある部分もある」¹⁶と批判した。

舟橋の批判した通り、「友達」は黒い喜劇という側面を持ち、茶番のような場面が数多く存在している。特に家族内の喧嘩の一部が荒唐無稽で、観客を興ざめさせる「余計な饒舌」のところは多い。しかし改訂後の「友達」ではそのような短所がかなり改善され、言葉遣いはより簡潔明瞭になった。例えば、改訂前の作品では一幕と二幕の幕間において管理人が観客にピラをくばり歩き、主人公を助けない理由を説明する場面があったが、改訂版ではこの内容は完全に削除された。猫談義などの家族の冗長な喧嘩の部分も多く削減され

た。このような改訂によつて、「友達」はさらに読みやすくなった。ただし、「友達」は戯曲として上演されたので、その改訂は安部公房スタジオの事情とも関係すると思われる。この辺について、友田は「主に上演劇団の配役上の都合で登場人物が変更された」¹⁷と指摘したが、その論拠は挙げられていない。実際、安部自身はこのことに言及していた。

『友達』の稽古も、いよいよ大詰をむかえ、台本の手直しも完了した。大半は、配役の都合上、祖母を祖父に変えたていどの改訂だが、一部かなりの変更を加えたところもある。その一例が『三男』の登場だ。¹⁸

安部のこの言葉から見れば、「友達」の改訂が安部公房スタジオの事情と関係するのは確かである。

「友達」(一九六七)、「友達」改訂版の上演台本(一九七四)、そして「友達」改訂版の文庫版(一九八七)を比較すると、さらに具体的な例が挙げられる。「友達」の管理人は女性であるが、「友達」改訂版の上演台本において管理人が男性に変更され、文庫版にはまた女性に戻った。このことは「配役の都合」と関係すると考えられる。

「友達」が上演されたときに管理人の役にふさわしい女性の俳優が見つからなかったため、管理人が男性に変更されたのだろう。

また、「友達」と「友達」改訂版の文庫本において次女が大根の皮を首にまくというシーンはあるが、上演台本には大根の皮が現れて

いない。大根の皮という道具を扱うのは困難なので、上演の時に割愛されたのだろう。さらに、「友達」と「友達」改訂版の文庫版の結末近くにおいて、檻に監禁された主人公の不安や孤独を表わし、彼の姿勢を生き生きと描いた一節があるが、上演台本においてそれは省略され、「舞台、暗黒の中で音楽」という一言に変更された。作品の分量を減らす必要があるため、安部はこの節を削除したのかもしれない。あるいは、舞台のスピーカーは「犬の遠吠え」をうまく放送できず、演出の出来栄が良くないから変更せざるを得ないという可能性も存在する。

「友達」改訂版ではかなり細かい改稿が施され、人物のセリフとト書きなどにも修正が加えられた。特に長男、男、婚約者が公園で会話する場面において修正が頻繁に行われた。次の①は「友達」からの引用で、②は「友達」改訂版の上演台本からの引用で、傍線部は修正が行われた箇所である。

①男 (鋭く) 何をしているんだ!

長男 (始めて気付いたように、男を振り向くと、狼狽どころか、旧友に出会いでもしたような笑顔を浮べ) 君、遅刻じゃないか、いけないねえ。

男 (女と、長男とを、見くらべながら、荒々しく進み出て) いったい、どうしたことなんだ!

婚約者 (後ろめたさを、隠しきれず) ぜんぜん、偶然だったのよ……

長男 ただし、当方としてはすばらしき必然のめぐり合いでしたな。

②男 (鋭く) 何をしているんだ！

長男 (平然と) 君、遅刻じゃないか、いけないねえ。

男 どういう事なんだ！

婚約者 偶然なのよ。

長男 そう、偶然。いかなる必然も、しよせん意識された偶然……じゃなかったつけ？

長男のト書きが大幅に削減され、男と婚約者のト書きは削除された。安部は俳優たちにより自由に人物を演じてもらい、作品の意味を増幅させるために、このような改変を行ったのだろう。改訂後の長男の最後のセリフも意味深くなった。長男は必然を強調するのではなく、必然を否定し偶然の普遍性を強調するようになり、彼の人物像はより複雑になっている。

以上のように「闖入者」は「友達」改訂版へと変容し、安部の様々な修正によって洗練された作品となった。その修正は作品自体を改善するためだけでなく、上演された際の安部公房スタジオの事情とも関連している。

二、「友達」の作品群から見た安部の思想変容

「友達」の作品群から安部自身の思想変容も窺える。

本稿の冒頭で引用していた『「友達」について』では、安部は次のように述べている。「(闖入者)と「友達」の」「テーマも、プロットも、まったくちがっている。もし、脚色と原作が同一人でなかったら、二人は生涯、許し合えない敵になってしまっだろう。私が、私自身であつたことに感謝する」¹⁹。しかし、「闖入者」と「友達」のテーマは異なっているが、作者の「二人」が互いに許し合えないとはまだ言えない。安部のこの言葉の意味を解くために、彼の当時の活動や時代背景に触れる必要がある。

先行研究において、武井は「闖入者」の家族がネオ・ファシズムを表徴すると述べた²⁰。それに対し羽山はその家族を、「政治的支配者に成りあがつて居する保守的暴力と、彼らと結托するアメリカ占領軍」の象徴として読んだ²¹。また、友田は「闖入者」の家族がGHQによる占領期の表象と読めると指摘した²²。確かに、「闖入者」の家族はアメリカ占領軍のイメージに近い。彼らは突然民主主義を説きながら主人公の家に闖入する赤の他人で、外国の軍隊を想起する。安部の当時の政治的立場も、この解釈を裏付ける。「闖入者」関係の先行研究において作品と安部の当時の活動と関連づける論文はないようだが、坂堅太は安部の一九五〇年代頃の運動について考察を行った。坂によると、一九五〇年頃から、安部の運動には政治的・マルクス主義的な(革命)の要素が強まっていく。安部の入党前後、

日本共産党はコミンフォルム批判に端を発する五〇年問題の影響により、急進的な反米民族主義へと旋回していた²³。

「闖入者」が発表された一九五一年に、安部は日本共産党に加入した。安部の入党から見れば、彼は日本共産党が提唱した民族主義に共感した可能性が大きい。当時の彼は共産主義に惹かれ、民族主義に接近する傾向が強かった。このような民族主義的な作者が書いた「闖入者」に、アメリカ占領軍の表象のような闖入家族が登場するのもおかしくないだろう。

ただし、安部は共産主義や民族主義から影響を受けたものの、それらの思想に完全に縛られていない。一九五二年一月の「私はかく生きる」というアンケートへの回答では、安部は「私は何も信ぜず、何も頼りにせず、なんにも希望をもちません。とはいえ、決して不安でも絶望でもないのです」²⁴と述べている。安部が述べたとおり、彼の思想はいつも変容し続けており、決して同じ枠組みに囚われてはいない。

一九五六年に安部は東欧に行き、共産主義についての再考を余儀なくされた。帰国後、彼の共産主義への関心は徐々に薄くなっていく。『砂の女』が発表された一九六二年に、安部は日本共産党から除名された。「友達」改訂版が発表された一九六七年には、安部の関心はずでに階級や民族から共同体の一般性に移っていた。一九六七年一月に発表された「都市について」では、安部は次のように述べている。

だが、隣人を受附けない、他者の組織の孤独に耐えられなくなったとき……無限の競争地獄に耐えられなくなったとき……はたして人は、まっすぐ死におもむくものだろうか。そんなことはない。人々はむしろ、偽の共同体にしがみつこうとする。(中略)おかげで現代の都市は、その冷酷な本質にもかかわらず、現象的にはむしろ、疑似共同体のスーパー・マーケットの観さえ呈している。²⁵

すなわち、人間はよく共同体にしがみつくが、共同体自体が絶えず変容しているので、現代の都市に存在するのはむしろ疑似共同体である。このことは、「友達」に潜在する共同体概念の解体と共通している。「闖入者」の民族主義的な作者と対照的に、「友達」の作者は民族や国家の枠組みから脱出し、共同体の根底に潜む一般的なものを問い直す。この意味では、二人の作者はなるほど「許し合えない敵」であろう。

「友達」改訂版が上演された後の一九七八年に、安部はインタビュー「都市への回路」の中でさらに次のように述べている。

共同体はいくら否定したって消えるものではない。消えないからこそ、絶対に拒絶する必要もあるんじゃないか。共同体の破壊は、同時に共同体の再生産でもあるわけだからね。永久革命的な言い方になるけど、無限の拒絶に耐え得る共同体でなければ、それを許容することはできないという……²⁶

ここでは、安部は自分の共同体観をさらに明確に示している。彼は共同体の永続性を認め、共同体を流動的なものとして捉え、共同体を無限に拒絶するような生き方の可能性を提示している。このような共同体への態度は、「友達」改訂版の三男の態度とかなり類似する。新しい人物である三男の登場は、安部自身の共同体観の更新とも繋がっているのだろう。

三、「友達」の人物造形

「友達」には多様な人物が登場し、そのなかで最も目立っているのは主人公の男、三男、次女の三人である。

前述のとおり、多くの先行研究において「友達」の主人公は気弱な人間で、「闖入者」の主人公のような敢闘精神を持つ人物ではないとされている。果たしてそうなのか。

「闖入者」の主人公の反抗として、主に四つの点が挙げられる。①自分で家族を追いつ出すこと、②管理人と交番に助けを求めること、③弁護士を訪ねること、④訴えのビラを貼ったりまき散らしたりすることである。改訂後の「友達」の主人公は①と②を行ったが、改訂前の「友達」の主人公は①と②だけでなく、③も遂行した。「友達」においても「友達」改訂版においても、④の反抗は見られないが、それは主人公の反抗精神が弱いと言うより、むしろ作品の状況設定が本来異なるからである。「友達」の主人公は突然家族に檻に閉じ込められ、翌日すぐ毒殺されるので、彼にはさらに反抗する余地が

なかったのだ。

「友達」とその改訂版では、自分の家に居る家族に対し、主人公は「もう、一分だって容赦しないからな！」と怒鳴り、善良なように見える家族に気を許さず、必死に家族を追いつ出そうとしている。家族に哀願したこともあるが、それも家族を追いつ出そうに行われた行為として理解できる。彼の哀願はそれなりに効果的で、それによって家族の態度は柔らくなる。概して言えば、「友達」の主人公は「闖入者」の主人公ほど敢闘精神を持っていないが、気弱な人間でもない。そもそも主人公を批判し、反抗精神があるかどうかを追究すること自体はそれほど価値のあることではないかもしれない。

「友達」関係の三作品において、主人公の反抗の姿勢よりむしろ家族の人物像のほうに興味深く、作品の主題と密接に関わっている。

三男は改訂版に新しく登場する個性的な人物である。三男の人物像を詳しく分析した先行研究はないが、特異な人物で考察する価値がある。和やかな家族に身を置く三男は時折家族に逆らい、主人公にも積極的に接近する。主人公は婚約者に理解を求めたが上手くいかず落ち込んでしまい、この時に三男は「人生には人間の数だけの道があるんだぜ」と述べ、人生の新しい過越し方を主人公に教える。

三男はかつて友達とある賭けをした。それは大通りで死んだふりをしたら、何分以内に介抱してもらえるかという賭けだった。彼は一〇分以上と賭け、そして六時間二十五分も大通りで死んだふりを続けていた。それ以来彼の世界観は変わり、「誰だって、賭のために死んだふりをしている、道端の男のさ」と考えるようになった。三

男は自分の経験によって共同体の本質を見抜き、共同体が持つ残酷さ²⁷を実感した。彼が持つ家族への不信感も、ここから生まれたと考えられる。その不思議な家族の一員である彼は、誰よりも共同体に近く、そして誰よりも遠いのだろう。彼がアラブ語の勉強を始めた理由も、家族からの脱出を期待し、異郷に憧れているからではないだろうか。しかし、三男はまだ希望を持っている。彼が主人公に伝えたいのは共同体の残酷さそのものではない。その残酷さを受け入れ自分で能動的に反抗し、ほかの生き方を探すことこそ、彼の哲学である。

次女²⁸の共同体に対する態度は三男のそれとは対照的である。先行研究において石沢は「彼女の善は悪そのものとなる。この二面性が存在の両義性となるとき、次女は現代の狂信的巫女の役割を担う」²⁹と指摘した。次女は「狂信的巫女」だと言えないかもしれないが、善と悪の両面性を持つことは確かである。特に主人公を毒殺する際の彼女の言動から、この両面性が顕著に現れる。石沢の観点によると、共同体に在ることこそ幸福の原理で、次女はその原理を信じているから、善意が悪に変貌する。換言すれば、主人公の男が家族に反抗し共同体に入ることを拒んでしまい、次女はそのような男の裏切りを許せないから男を殺したのだ。しかし、次女の行動原理はそれほど単純なのだろうか。

まず次女の犯行過程を確認しよう。男が檻に閉じ込められた翌日に、次女は目が覚めた男に食事を勧める。この日次女以外の家族はほとんど家にいない。目撃者が少ないのは犯行に有利なので、彼女

はこの日を選んだのだろう。男に与えたおかずは塩辛いということも彼女の計画の一環と思われる。次女はおかずに意図的に多くの塩を入れていたのかもしれない。そうしたら男は自然に甘い牛乳を飲みたくなり、犯罪がスムーズに成功する。毒が入った牛乳を飲み死んだ男を見て、次女はすすり泣く。次男は次女の様子を見て「なんだ、おまえ、またやってしまったのか」と述べる。次男の話から見ると、次女は以前にも同じような犯罪を行い、犯罪を行った経験がある。以上のことから見れば、次女の犯罪は衝動に駆られた行為ではなく、計画的な行為と言えよう。

では、次女の動機は何だろうか。男に牛乳を与える前に、次女は「変だなあ。私の頭の中は、いつもあなただけでいっぱい」と言い、男への恋心をほのめかす。彼女は男が共同体から脱出したいことを「よく分って」おり、男の心「が遠くに飛んで行ってしま」い、周囲の物事が「だんだん氷細工みたいに、融けはじめているんじゃない」と述べる。それに対し、男は「よく分るね」と答える。ここで次女が述べているのは共同体から逸脱する人間の体験と考えられる。彼女のこの話から見ると、彼女も昔共同体を離れようとし苦痛を覚えた。その苦痛は耐えられるものではないと理解できたので、彼女は共同体での生活を選んだだろう。その裏付けとして次女のこの言葉が挙げられる。男が共同体にしがみつくことの意義を理解できず反抗する際に、次女は次のように言っている。

でも、逃げ出すってことは、行方不明になってしまふことな

のよ。あなたが想像している以上に、恐ろしいことなのよ。
分っていないが、あなたを、みすみすそんな危険にさらすだなんて、そんなこと、出来るわけがないじゃないの。

人間の共同体は永続的で、それに逆らうことは不可能だと次女はよく分っている。共同体に戻ることを拒否する限り、男は絶望と苦痛に浸ったまま死を迎えるしかない。その絶望と苦痛を取り除くために、次女は男を殺すことにする。次女の行動は能動的で、自分と家族のためではなく、恋する男のために彼を殺すのである。残酷な行為ではあるが、次女にとってこれ以外男を救う方法はない。男が死んだ後で次女は彼に「さからいさえしなければ、私たちなんか、ただの世間にしかすぎなかったのに」と言い、悲しくすすり泣く。次女は男に、自分と同じように共同体に順応すれば何の問題もなく普通に暮らせると伝えたかったが、男はそれを理解できず悲惨な結末を迎えてしまう。

三男も次女も共同体には逆らえないと分かっているが、相反する道を選ぶ。三男は永遠に共同体に対抗することを選ぶのに対して、次女は永遠に共同体に順応することを選ぶ。三男が希望を語り、次女は絶望を語り、二人が作品の二つの相反する主題を前面に押し出す。この二つの主題は相反するように見えるが、実際には表裏一体でもあり、概念自体が相対化される共同体の存在を読み手に暗示している。

四、「友達」における共同体概念

「友達」改訂版では、共同体概念自体が問われている。前述の通り、改訂版において家族は全体としてより礼儀正しく、男に対して好意的になっている。具体的な例を挙げると以下ようになる。

①男 ふざけるな。そっちがどう思おうと、とにかくここはぼくの部屋なんだ。

長女 当然じゃないの。さみなけりゃあ、あなたがここにいらっしゃるわけないでしょ。

次男 さもなけりゃ、第一、そんなへらず口を、いつまでも黙って聞いていてやったりするもんかい。

次女 およしなさいったら。

次男 これは失礼。ちつとばかり、ふつか酔いなさ。ちくしょうめ！

②男 ふざけるな。そっちがどう思おうと、とにかくここはぼくの部屋なんだ。

長女 当然じゃないの。さみなけりゃあ、あなたがここにいないわけないでしょ。(笑う)

次男 (嘲笑的な高笑い)

次女 (小声で) およしなさいったら。

次男 ふつか酔いらしいよ、俺。

①の「友達」において、家族に反抗する男に対し長女は「いらつしゃる」という皮肉な表現を使う。②の「友達」改訂版においてそれが「いる」に直され、「(笑う)」というト書きを加えられた。このように、長女の男に対する態度が柔らかくなる。次男の態度についても同様のことが言える。①において次男は男を嘲笑し、「ちくしゅうめ」のような罵言を吐く。②においてそれは「嘲笑的な高笑い」と変り、罵言も削除された。

男に対する態度だけでなく、改訂版では家族たちの相互の関係も改善された。「友達」において、警察に見離された後で男は引き続き家族を追い出そうとし、家族たちは次のように口論する。

長女 ふん、お上品ぶって。

次女 (がらりと態度を変えて) ひがむな、ひがむな。

父 おいおい、仲間割れや喧嘩は罰金ですよ！

この三行の内容は改訂版に見当たらず、家族内のこの採め事は消去された。削除だけでなく、改訂版には家族の暖かいシーンも付け加えられた。改訂前の公園のシーンには婚約者、男、長男、末娘だけが登場するが、改訂版において父、母、次男、祖父は登場し、家族たちが静かに「春の名残を心ゆくまで味わう」。

だがこの家族は主人公の家に闖入し、主人公の意思を無視してしがつき、最後に主人公を監禁し彼を殺す人間たちで、強い暴力性と危険性を持っている。彼らが礼儀正しくやさしくなるほど、主人

公と読み手に恐怖を与える。それに、家族の暴力性と危険性は彼ら独自のものではなく人間の共同体に遍在する性質と考えられ、普遍性を有している³⁰。作品のなかでもこの普遍性に言及した箇所がある。主人公の婚約者は兄を呼び闖入家族の問題を解決しようとしたのに、兄は逆に家族に惹かれ家族に加入したがっている。意気込む兄に対し、家族の父は自分たちがしていることはありふれたことで、共同体に入ることには「世間なみの気持を持ってさえいれば、誰もがせずにはいられない」のだと述べる。「友達」改訂版の家族は、人間の共同体の縮図として理解できよう。

「友達」改訂版の家族は全体として普遍性を持つ一方、各々の構成員は強い個性を有している。家族たちはそれぞれ異様でグロテスクなように見える。例えば奇声を出す末娘、ジャムに拘る祖父、善良なのに男を毒殺する次女など。ここには共同体概念の相対化が見受けられる。すなわち、共同体という概念自体が作られたものと考えられ、「共同体」は本来存在せず、われわれが見ているのは異なる個体にすぎない。「友達」改訂版の家族は共同体を成したように見えるが、読み手としては、家族のそれぞれの構成員のみに注目し、家族を全体として見ないという読み方も可能である。共同体に対し、三男のように反抗するか、次女のように順応するか、作品においてはこの二択しかないようである。しかし、読み手の視点からすれば、そもそも共同体という概念に拘らず、登場人物、しいては現実世界の人間を一人一人の個体として見ることは十分に可能ではないだろうか。共同体概念は、そもそも脆弱性を持っていると言わざ

るを得ない。

このように、「友達」改訂版は家族という疑似共同体を描出し、共同体概念自体が持つ脆弱性を現前させている。作品において家族はある日突然現れ、また突然消えてしまふ次の家に侵入する。そのルートは不可解で予測できない。人間社会の様々な共同体もこの家族のように、概念上は脆弱なのに絶えず生成し変転し、暴力性を持つのに人を優しく引き寄せ、世間のどこにも浸透していき、未来永劫に存在している。「友達」改訂版は共同体概念そのものを相対化し、読み手に共同体の再考を求める作品である。

おわりに

本稿においてはまず「友達」の改作過程を具体的に考察し、三作品の相違点を整理した。先行研究で着目されなかった「友達」改訂版の上演台本を取り上げ、戯曲の内容と安部公房スタジオとの関係性を明示した。次に作品の時代背景と安部自身の活動を視野にいれ、「闖入者」と「友達」の作者の二人は敵という安部の発言の意味を解明し、作品と安部の思想変容との関連性を明確にした。主人公、三男、次女の人物像をも分析した。主人公は気弱な人間でなく、三男と次女とは対照的で作品の二つの主題を前面に押し出すと述べた。最後には「友達」の共同体概念について探究し、家族は改訂を経て善意的になったが暴力性を持ち、共同体概念自体が脆弱であると指摘した。

「友達」は改訂を経て共同体概念を相対化し、共同体についての再考を読み手に求めている。「闖入者」において、共同体概念自体はあまり問われず、アメリカ占領軍のような暴力的な共同体への批判が前面に押されていたが、「友達」において、家族は優しく描かれ、共同体の根底に潜む一般的なものがない直されている。「友達」では次女の共同体への順応が描かれているが、「友達」改訂版では三男という新しい人物が登場し、共同体に対抗する可能性を提示している。順応に対抗か、この図式の成立によって共同体概念自体が浮き彫りになり、図式から逸脱する可能性はほめかされ、共同体概念自体の脆弱性が暴露させられる。

「友達」関係の三作品は安部のそれぞれの時期の共同体観の投影としても読める。安部は頻りに自作を改稿する文学者であり、今回の「友達」の改訂過程の考察からわかるように、その改稿の理由は、安部が一定の枠組みに縛られずに思索し続けていることにある。古い枠組みを破壊しテキストの意味を増幅させ、より自由に読まれるのが、安部の改作の意義ではないだろうか³¹。

(り そげん・映像・現代文化論研究室)

* 本稿は二〇二三年一月一八日に、北海道大学で開催された第七回北海道大学映像・現代文化論学会大会における口頭発表の内容をもとに、若干の加筆を行ったものである。

* 本研究はJST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2119の支援を受けた。

注

- 1 安部公房「友達（二幕十三場）」（『文芸』一九六七年三月号、一九六七・三、河出書房新社）。
- 2 安部公房「友達」について」（『安部公房全集』二〇、一九九九・五、新潮社）、四八七頁。初出誌は一九六七年三月号『文芸』（河出書房新社）で、初題は「〈作者付記〉」である。
- 3 安部公房「闖入者」（『新潮』一九五一年一月号、一九五一・一一、新潮社）。
- 4 部数は限定されたが、上演する際の台本は安部公房スタジオを通じ発行された。安部公房『改訂版 友達 黒い喜劇 二幕』（安部公房スタジオ上演台本）（一九七四、安部公房スタジオ）。
- 5 安部公房「友達（改訂版）」（『友達・棒になった男』、一九八七・八、新潮社）。
- 6 武井昭夫「風化された批評精神—青年座上演『友達』評」（『新劇』第一四巻第五号、一九六七、白水社）。
- 7 羽山英作「『友達』をとりまく『友達』—青年座公演『友達』」（『新日本文学』第二二巻第五号、一九六七・五、新日本文学会）。
- 8 石沢秀二「友達—闖入する友達の恐ろしさ」（『國文學 解釈と教材の研究』第一七巻第一二号、一九七二・九、学燈社）。
- 9 友田義行「地下茎状の原作—安部公房『友達』論」（『文学』第一五巻第六号、二〇一四・一一、岩波書店）。
- 10 紙幅の都合上、ほかの二作より、「友達」改訂版の考察に重点を置く。
- 11 武井昭夫「風化された批評精神—青年座上演『友達』評」、前掲、八六頁。
- 12 辻合敏明「暗喩の論理 劇評—西武劇場（安部公房スタジオ）『友達』（『テアトロ』第三七七号、一九七四・七、カモミール社）。
- 13 辻合敏明「暗喩の論理 劇評—西武劇場（安部公房スタジオ）『友達』」、

- 前掲、四三頁。
- 14 友田義行「地下茎状の原作—安部公房『友達』論」、前掲、五一頁。
- 15 三島由紀夫「『友達』と『万延元年のフットボール』（谷崎賞選後評）」（『中央公論』、一九六七・一一、中央公論社）、二二八頁。
- 16 舟橋聖一「虚実（谷崎賞選後評）」（『中央公論』、一九六七・一一、中央公論社）、二二八頁。
- 17 友田義行「地下茎状の原作—安部公房『友達』論」、前掲、五一頁。
- 18 安部公房「『友達』の稽古も—周辺飛行三三」（一九七四・六、『安部公房全集』二五、一九九一・一〇、新潮社）、三九頁。
- 19 安部公房「『友達』について」、前掲、四八七頁。
- 20 武井昭夫「風化された批評精神—青年座上演『友達』評」、前掲、八五頁。
- 21 羽山英作「『友達』をとりまく『友達』—青年座公演『友達』」、前掲、一一六頁。
- 22 友田義行「地下茎状の原作—安部公房『友達』論」、前掲、五三頁。
- 23 坂堅太「安部公房と『日本』—植民地／占領経験とナショナリズム」（二〇一六・一〇、和泉書院）、一六〇—一七頁。
- 24 安部公房「〈何ものも信ぜず〉『私はかく生きる』のアンケートに答えて」（『安部公房全集』三、一九九七・一〇、新潮社）、一八一頁。初出誌は一九五二年一月号『婦人朝日』（朝日新聞社）である。
- 25 安部公房「都市について」（『安部公房全集』二〇、一九九一・五、新潮社）、三九九頁。初出誌は一九六七年一月号『新潮』（新潮社）である。
- 26 安部公房「都市への回路「インタビュー」」（『安部公房全集』二六、一九九一・一二、新潮社）、二二八頁。初出誌は一九七八年四月号『海』（中央公論社）である。
- 27 人間の共同体は本来、人間の安全を守り、人間が進歩するために結成されたものだが、現代社会において、それはかならずしも本来の目的

を果たしたのではない。特に日本社会では、社会全体を一つの共同体と見做さず、会社や家族など小さな共同体のみを認める傾向が見受けられる。その小さな共同体に属していない「赤の他人」であれば、排除するのはもちろん、目の前で死んでいても助ける気がしないのは、一部の人のとつてすでに「常識」になっている。三男が抵抗を感じるのは、現代の共同体に見られるこのような残酷な「常識」にほかならない。

同じく「友達」改訂版の中の次女について検討する。

石沢秀二「友達―闖入する友達の恐ろしさ」、前掲、八八頁。

周知のように、人間の共同体は暴力性と危険性を持つている。レイナスは戦争によって共同体のこのような性質を深く認識し、『全体性と無限』（レイナス著、熊野純彦訳、二〇〇五―二〇〇六、岩波書店）を書きあげ、「全体性」にけつして包み込まれることのない「無限」について論究した。日常において、われわれは共同体の暴力性と危険性をそれほど感じていないかもしれないが、それは紛れもなく潜在しており、誰もが共同体に襲われる可能性を持つている。また、二章で論じたとおり、安部は常に共同体というものを問題視しているので、作品によって人間の共同体に存在する普遍的な問題を示す可能性は非常に高い。安部の『砂の女』、『燃えつきた地図』などの共同体を探究した作品もその傍証である。

「友達」は安部の死後にも度々上演された。二〇〇八年に『友達』が演出家の岡田利規によって再演され、二〇一二年にシェル・オーケ・アンデション監督の映画『友達』は東京で再上映された。「友達」はこれから変容し、生き続けていくのだろう。